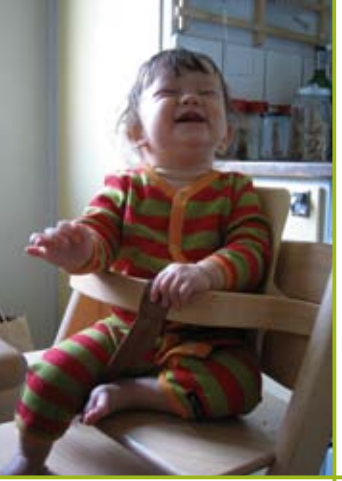
プログラム実例
木育Q&A掲載

木育達人（マイスター）のための

木育活動ガイド

実践編



C O N T E N T S

P 1　はじめに
P 2　木育とは
P 3　1　まずは、木育の考え方を再確認しよう
P 4　2　木育マイスターの役割と心構えを肝に銘ずる
（1）木育マイスターとは
P 6　（2）木育マイスターとしての自覚を持つ
P 7　木育マイスターの木育宣言
P 8　（3）頭を柔らかくするために、
「きょうから木育 365 のヒント」を読む
P10　3　木育活動を進めるには、どうすればいいか
（1）プログラム企画の立て方
P12　（2）プログラムの進め方
P14　（3）プログラムの伝え方
P15　（4）木育プログラムの具体例
1）木育マイスターが研修で作成したプログラム
P16　2）津別小学校での木育授業
P20　3）建築士やデザイナー向け「旭川・木育ツアー」
P22　木育 Q&A
P30　木育活動に役立つ情報ページ
〔木製遊具のある施設・木工体験のできる施設一覧表〕
〔木育に活用できそうな助成事業や基金〕
〔広葉樹材を小売りしている店〕
〔参考図書、ウェブサイト〕

はじめに

この冊子は、木育マイスター（木育の達人）や木育マイスターになりたいと思っている方、木育に興味をお持ちの方などに向けて企画編集されています。

北海道では 2010 年（平成 22 年）度より、木育活動の普及推進者である木育マイスターの育成研修が始まりました。初年度は、4 日間の研修受講と木育活動の OJT を体験した 38 名が木育マイスターとして北海道から認定を受けました。その 38 名のプロフィルは様々です。木材会社社員、大工、ネイチャーガイド、幼稚園・小学校教員、樹木医、介護士、薬剤師、地方公務員、元営林署職員‥‥等々。

木育に関する本としては、木育マイスター研修のテキストとして作成された『木育達人 (ﾏｲｽﾀｰ) 入門』（発行：北海道、非売品 *）や一般向けの『木育の本』（煙山泰子・西川栄明共著、発行：北海道新聞社）などが刊行されています。今回の冊子は、木育マイスターをはじめとする木育活動を行う立場の人が、どのような役割を担っているのか、プログラム作成はどのようにすればいいのかなどを、事例を紹介しながら具体的に記したものです。木育活動を行う際の疑問点や木育マイスターに関する質問などにお答えする Q&A ページも設けました（読み応えあり）。

上記 2 冊と合わせて読んでいけば、木育活動の進め方がよりよく理解できます。2010 年度に実施された研修での講義内容も一部取り入れました。研修生たちが作成したプログラム事例や木育宣言なども掲載していますので参考にしてください。

様々なアクティビティ事例や森林・木に関する情報などについては、参考書籍や資料などでフォローしていただければと存じます。

北海道で始まった木育の活動が、今後、道内だけではなく全国各地へ広がっていけばと願っております。そのためにも、木育マイスターをはじめ、この冊子の読者のみなさまのご尽力を期待する次第です。

＊『木育達人 (ﾏｲｽﾀｰ) 入門』は、北海道水産林務部林業木材課のウェブサイトからダウンロードできます。
http://www.pref.hokkaido.lg.jp/sr/rrm/

木育（もくいく）とは、

子どもをはじめとするすべての人が
「木とふれあい、木に学び、木と生きる」
取り組みです。
それは、子どものころから
木を身近に使っていくことを通じて、
人と、木や森とのかかわりを主体的に考えられる
豊かな心を育むことです。

＊木育は、2004年（平成16年）度に、北海道と道民による「木育推進プロジェクトチーム」で検討された新しい言葉です。プロジェクトでは、木育の考え方や必要性が議論され、上記のような基本理念が文章化されました。

●2006年（平成18年）9月に閣議決定された「森林・林業計画」（林野庁）に記された「木育」

市民や児童の木材に対する親しみや木の文化への理解を深めるため、多様な関係者が連携・協力しながら、材料としての木材の良さやその利用の意義を学ぶ、木材利用に関する教育活動

●『木育インストラクター・テキスト』（NPO法人 活木活木（いきいき）森ネットワーク発行2010年）の「『木育』とは何か」の項より

「木育」は幼児期から原体験としての木材との関わりを深め、豊かなくらしづくり、社会づくり、そして森づくりに貢献する市民の育成をめざす活動です。

●岐阜県がめざす木育〔『木育のいっぽ』（岐阜県林政部発行 2008年）より一部抜粋〕

「木育」とは、まだ聞き慣れない言葉ですが、身近な存在として森や木とふれあい、人と人、人と自然とのつながりを自ら考えることのできる豊かな心を育むことです。（中略）木育によって、子どもたちが知識の取得だけではなく、自然への思いやりを深め、将来的に森林や自然について自ら考え行動する人に育つことを願い、活動を進めています。

1 まずは、木育の考え方を再確認しよう

左のページに書かれている「木育の理念」。木育に興味のある方なら、何度も目にして読み返していることでしょう。この理念は、いろいろな思いが込められた示唆に富んだ文章です（参考までに、北海道以外で取り組まれている木育の定義も掲載しました）。

「子どもをはじめとするすべての人が」。木育は子どものためのものだと思っている人がけっこういます。もちろんそうではありません。赤ちゃんから高齢者の方まで全世代にわたって対象となります。

「木とふれあい、木に学び、木と生きる」。これは、木育理念の肝ですね。木とふれあい積極的に関わることによって、「五感と響きあう感性」がバランスよく育まれます。人は大昔から木と身近に接しながら木に学び、木の恩恵を受けて暮らしてきました。これからも木や森の正しい姿を理解し、人と木が共存しながら生きていくのです。

最後の「豊かな心を育むこと」。これが究極の木育がめざす方向でしょう。木の種類をいっぱい覚える、木工作が上手にできるようになったということが、最終目標ではないのです。

今一度、木育の考え方を再確認し、木育の推進者としての活動をスタートさせましょう。

〔講師より一言〕

木育は人の心に木を植える、心の森づくりのようなもの。木育に決まったスタイルはありません。子どもからお年寄りまで、それぞれが“楽しい”“うれしい”と、素直に感じられるやり方で木育を始めてみませんか。

by 煙山泰子
（木育マイスター育成研修講師、木育ファミリー代表）

「木とふれあい、木に学び、木と生きる。木の砂場で子どもを遊ばせることや、木の箸づくりをすることだけが木育ではない。大人にも体の不自由な方にも木育があることを忘れずに」

2 木育マイスターの役割と心構えを肝に銘ずる

（1）木育マイスターとは

木育マイスターは、北海道が認定した木育を普及させる推進者です。ある分野（森林、木材、ものづくり、幼児教育、介護など）の専門的知識を持ち、企画力やコーディネート力のある方が理想です。自分の得意分野でない活動をする際には、その分野に強い方の協力を得てプログラムを組み立てるようにします。学校や団体から依頼があれば、木育プログラムの企画立案や運営実施のアドバイスやプロデュースをしていきます。自分の得意分野では、自らアクティビティを行う場合もあります。

木育マイスターに必要なのは、プロデューサーやコーディネーターとしての役割です。コンセプトや対象者に見合ったプログラムの企画を作り、そのプログラムにふさわしい協力者や専門家を見つけて依頼し、予算も考慮しながら実行に移していく力が求められます。自分ひとりだけでプログラムを実行しなくてもいいのです。人と人をつなげる役目というのも重要です。

木育マイスター認定を受けていなくても、木育活動に取り組んでいく方は上記の内容をよく理解して活動を進めてください。一人だけが指導するよりも、広がりのある木育活動が実現できます。

〔講師より一言〕

木のオタクを育成するのではない。森や木を上手に活用して社会を構築していく人を育てる役目がある。

by 宮本英樹
（木育マイスター育成研修講師、NPO 法人ねおす専務理事）

どのように協力者や専門家を探すのか

P5 にちょっと敷居の高そうな研究機関から、道内にほとんどいなくなった樽・桶職人まで、木育活動の協力者候補を掲載してみました。では、どうやって自分がイメージしている適任の方や団体を探し出すのか、いくつかのパターンを紹介します。

①自分の知り合いや人脈からあたってみる

まずは、身近な知り合いで木育活動の協力者を探す。日頃からの人脈づくりが役立つ時。

②地元の役所や団体に相談する

地元の市町村役場の林務担当者、管内に所在する総合振興局森林室や森林管理署、木工体験施設やネイチャーセンターに行って相談する。

③木育関係の仲間に投げかける

木育マイスターなら、一緒に研修を受けた人たちに、「こんなことやりたいけど手伝ってもらえませんか」と投げかけてみる。

④メディアやネットから情報収集する

新聞の地方版記事や夕方にテレビ各局が放送している情報生番組などでは、地元に住んでいてもこんな人がいたのかと思うような職人さんなどが紹介されることがある。こういう情報をこまめにチェックしておく。インターネットで条件をあてはめて検索するのも、一次情報の入手に便利。

「餅は餅屋。すべて自分ひとりだけでやろうと思うべからず。その道の専門家を見つけて協力してもらえばいい。木育マイスターはプロデューサーやコーディネーターの役割を果たすべし」

木育活動の協力者候補

（森林関係、森や樹木の専門家）
地元の森林組合、各地の総合振興局森林室（道庁）、森林管理署（国・林野庁）、森林総研（札幌）、林業試験場（美唄）、大学演習林（北大、東大など）、地方自治体の林務関係部署、造林業者、個人の林業家、造園業者（植木屋さんも）、果樹農家、森林インストラクター、樹木医、元営林署員、山菜採り名人、きのこ博士

（木材関係、木材の専門家）
木材会社（製材、合板メーカーなど）、木材販売会社、銘木店、林産試験場（旭川）

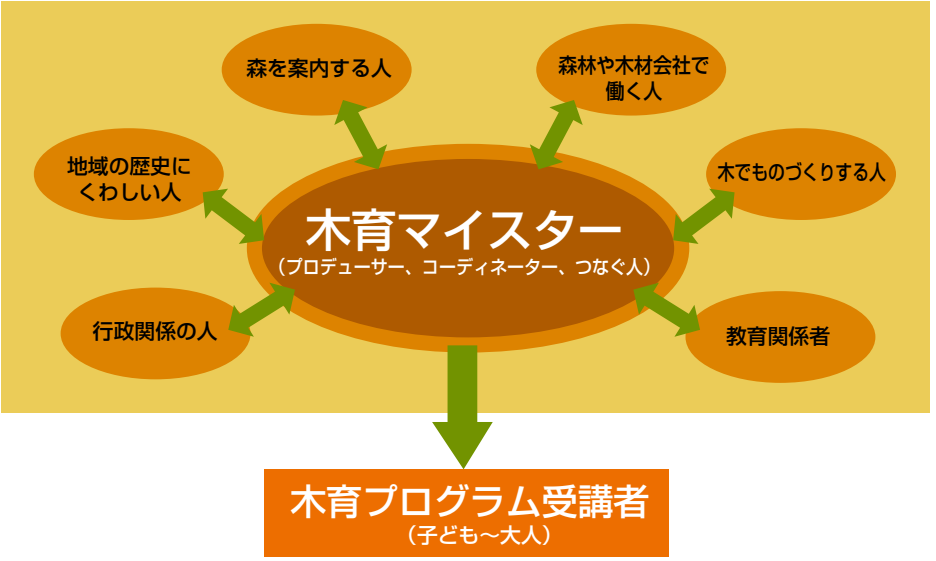
（木でものづくり）
木工所、家具メーカー、工務店、住宅メーカー、割り箸製造業者、木工作家、木工職人、大工、木彫師、指物師、樽・桶職人、ログビルダー、古民家を修復して住んでいる人、木工体験施設、製紙工場

（ネイチャーガイド系）
ネイチャーセンター、エコミュージアム、自然関係の財団、NPO 法人（自然、環境教育、野外活動など）、個人のネイチャーガイド

（教育系）
保育園、幼稚園、小・中・高校、農業高校森林科学科、大学（農学部、教育学部、芸術系、考古学関係など）、専門学校（道立高等技術専門学院造形デザイン科など）

（公共施設、博物館など）
公共体験施設（遊具設置施設など）、青年の家、博物館（開拓記念館、北方民族博物館など）、郷土資料館、美術館

（その他）
バイオマス関係、環境調査会社、高齢者関連施設、介護士、林業や環境問題に詳しいジャーナリスト、木育ファミリー



（2）木育マイスターとしての自覚を持つ

1）自分の言葉で木育を語る

p2 に木育の理念や定義を掲載しています。読んでもらえばわかるように、少しずつニュアンスが異なります。それは、推進母体が木育をどのように捉えているかの差異なのでしょう。

木育活動をしている個人でも、自分の強みや専門分野によって木育の考え方の優先順位やポイントの置き方に違いが出てきます。「木育の理念」を理解した上で、自分にとっての木育とは何かをしっかり考えておくことが必要です。

木育に対する考えや思いを整理して、「私の木育」や「木育宣言」として文章にまとめておく。木育の関係者に発表する場があれば、声を出して発信する。これからの木育活動の行動指針となり、活動のベースとなります。いろいろなプログラムを実行していく際の、基本となる活動ポリシーです。

次ページには木育マイスター研修受講生の「木育宣言」をいくつか紹介しています。参考にしてください。

→『木育達人入門』p7、『木育の本』第７章 p127　参照

2）勉強する、視野を広げる

p4 で自分の得意分野以外のアクティビティを行う場合は、その道の専門家に協力してもらえばいいと記しました。ただし、プログラム全体の企画を立てる場合には、ある程度の知識が必要です。そのためにも、自分の専門外でも参考図書や資料を読む、勉強会に参加するなどして、最低限の知識を得ておきましょう。

この冊子の最後には参考図書を紹介していますので、興味のあるものから手にとってみてください。

→ p31、32 参照

〔私の木育、木育宣言を書くヒント〕

自分の強みや得意なフィールドは？
森、木、自然環境などで興味のあることや、気になっていることは？
木育に興味を持ったきっかけは？
木育について自分ができそうなことは？
木育を通して実現したいことは？
どんな人に、どこで、どのような木育をしたいのか？

「木育って何かと問われたら、自分の言葉で語れるようにする」

木育マイスターの木育宣言

「2010 年度木育マイスター育成研修」を受講して木育マイスターの認定を受けたみなさんの中から、５名の方が書いた「木育宣言」を紹介します。

私が“木”に携わったのは今の会社に入ってから。“木”に触れ合ったのは、多分、私自身生まれて間もない時からだろう。“木”はそれだけ身近で、幸せな事に気がつかないうちから周りにある。ほとんどの人が“木の製品”をあたり前の様に使って、“木”でできている事さえわからず日常を過ごしている。

彼らに伝えなくてはならない！！
木のやさしさ、大切さを身近な所から伝えたい！！
『木は２度生きる』　彼らの考えも生まれ変われる！！

（木材会社社員）

木は生きている　木にも個性がある
それぞれに生きている
木はおもしろい　森はおもしろい
だから私は木や森が好きだ
それを他の人にも感じてもらえたら
だから私は森や木のおもしろさを
人に伝えたい

（林務担当の地方公務員〔樹木医〕）

徹底的に外で遊びます！
小さい頃自分がそうしていた様に、とにかく森や川や自然の中で遊びます。子どもだけではなく大人も引きつれて。それが私の役割だと思っています。近所にいる全く外に興味のないお母さん友達や家でゲームばかりしている子ども達を外に連れ出し、自分の所属する活動を利用したりしながら、自然の心地良さ、空気の味、光の美しさに気付いて欲しいと思っています。

子どもは大人が楽しまないとついてこないです。ここを重視したいです。

（自然体験活動グループのスタッフ）

私は、豊かな森に特徴づけられる阿寒国立公園で自然ガイドとして、様々な方と森歩きを楽しんでいます。たくさんの樹木に囲まれた多様な命との触れあいを感じていただけるよう心がけていますが、さらに自分自身とのつながりも見出してもらえるよう活動をしていけたらと思っています。

また、地域の子どもたちが、ふるさとのことをより良く認識できるよう、木のある町の風景、暮らしとのつながりを実感して育ってもらえるよう、様々な人たちと協力して取り組んでいこうと思います！

（ネイチャーガイド）

毎日の仕事で木を使い、端材で、おもちゃを作ったのが始まり。
現場人間なんで、ものを作る楽しさ、木の温かさを、実習として子ども達に教えたい。

（大工）

（3）頭を柔らかくするために、「きょうから木育 365 のヒント」を読む

ここまで読んでくると、何だか木育活動を企画実行する立場の人はいろいろな要件が必要で、大変だなと思われるかもしれません。でも、難しく考えることはありません。まずは、気楽に木育について取り組めばいいのです。

プログラムを立てる前に、原点に戻って頭を柔らかくして「きょうから木育 365 のヒント」（作成：煙山泰子）を読んでみましょう。「ああ、こんなのも木育なのか」と、すうっと木育の世界に入り込んでいけるでしょう。

ここでは、「365 のヒント」の一部を掲載します（抜粋しているため、以下の数字は連番になっていません）。

→ 『木育の本』第 8 章 p137 参照（全文掲載）

木とふれあう

〔感じる〕
001　森の空気を吸う
002　森を歩く（森の地面は時間をかけた葉っぱのじゅうたん）

〔楽しむ〕
010　樹の下で本を読む
012　薪割りをする

〔憩う〕
024　木のベンチや椅子で憩う

〔遊ぶ〕
029　木のおもちゃで遊ぶ（積木、ガラガラ、パズル、剣玉、コマ、木馬、乗り物）
031　虫とり、植物採集
033　ツリーハウス（木の上の小屋）でごっこ遊び

〔行く〕
037　身近な公園に行く
042　巨樹や巨木に会いに行く

〔見る〕
048　芽ばえの様子を見る（芽吹きの魔法）
050　木の樹皮の模様を見る

〔聴く・聞く〕
055　耳を澄ます
056　森に吹く風の音を聴く

〔触れる〕
064　樹皮に触れてみる（ごつごつ、ざらざら、すべすべ…）
069　古い木の家の柱に触れてみる

〔匂い・香りをかぐ〕
073　いろんな木の葉の香りを嗅いでみる
082　思い出の中にある木の匂い

〔味わう〕
082　木の実を味わう（栗、クルミ、松の実、ハシバミ）
090　木の器で味わう（枡、お椀、弁当箱、木樽）

〔癒す・治療する〕
091　森の力で癒される（森林浴、森林療法、森のヨガ、森林セラピー、森林気功）

〔使う〕
102　昔から使われてきた木の道具を使う（まな板、へら、お盆、おひつ、ちゃぶ台、タンス、風呂用品）

〔話す・語る〕
116　木や森の思い出を語る

木に学ぶ

〔見学する〕
119　製材工場を見学する
120　荒れた森と手入れされた森を見比べる

〔体験する〕
127　大工仕事を体験する（釘うち、カンナがけ、のこぎり、キリ）
132　森でキャンプする

〔気づく〕
136　身のまわりの、どこに木が使われているのだろう（一枚の紙から建築まで）

〔集める・撮る〕
145　いろんな葉っぱを集める
149　四季の樹木を撮る

〔知る〕
157　針葉樹と広葉樹の違い
161　林業って、どんな仕事なの？

〔調べる・探る〕
163　年輪を数えてみる（木材の年輪は、木の履歴書）
166　地域固有の樹種について

〔作る〕
173　自分の欲しいものを作る
174　生まれてくる子のために玩具を作る

〔描く〕
181　葉っぱを描く、幹を描く、根っこを描く、枝を描く

〔掘る・植える〕
189　人生のいろいろな記念に植樹する

〔知識を伝える〕
197　原生林と自然林と二次林の違いを伝える

〔教える〕
202　自然界での樹木の子孫の増やし方
208　樹木と木のつながり

〔話を聞く〕
211　森の専門家に話を聞く（林学者、森林科学者、生物学者、林業家、樹木医、造園家）
216　昔の生活を聞く

木と生きる

〔自分で使う〕
218　国産間伐材の割りばしを使う

〔みんなで使う〕
225　給食用の食器を地域の木で作る

〔買う〕
233　作り手の「顔が見える」木製品を買う
236　認証材マークのついたものを買う（FSC 認証、SGEC 認証など）

〔語る〕
242　孫や子ども達に昔の生活を語る（炊事、薪割り、風呂たき）

〔モノを伝える〕
248　日本古来の生活用具（臼、杵、桶、ちゃぶ台、しゃもじ、おたま）
253　家の柱に、子どもの身長をきざむ

〔技を伝える〕
255　鉛筆の削りかたを伝える
258　大工・宮大工の建築技術

〔文化を伝える〕
263　行事のなかで木との暮らしを伝える（神棚、絵馬、お札、仏事、お葬式、新築、もちつき）

〔創る〕
272　木遊びガイドブック、木遊びマップをつくる

〔繕う・再利用する〕
277　古い家具や道具を修理、再生して使う
279　昔の道具を転用して楽しむ

〔研究する〕
285　木の香りの成分と人に与える効果

〔提案する〕
292　木登りの木 100 選

〔行動する〕
300　各種の木工教室に参加する（親子、カップル、親父、母親学級、シルバー）

〔愛でる・楽しむ・慈しむ〕
309　拾ったドングリが発芽する様子を愛でる
313　森でコンサート（楽器、合唱、演劇）を楽しむ

〔勧める〕
317　木に気付く生活「木づき生活」のススメ

〔贈る〕
326　お年寄りに木の杖プレゼント

〔誰かのために作る〕
334　おもちゃを作る（我が子のため、孫のために…手作りする）

〔支援・貢献する〕
342　企業の社会貢献（CSR）として木育をすすめる

〔集う〕
350　大きな樹のまわりに集う

〔つなぐ〕
363　地域の人材をつなぐ（木育コーディネーター）
365　「木育」を合言葉に、いろいろな活動をつなげる（木育はつながりのキーワード）

「日々のちょっとしたことから木育が始められる。身構えることはない」

3 木育活動を進めるには、どうすればいいか

（1）プログラム企画の立て方

〔『木育達人入門』第６章 p43 参照〕

企画の要となるコンセプトをしっかりまとめる

プログラム企画で最も大切なのは、「コンセプト（ねらい）」です。何をテーマにして、何を伝えるのか。企画の基本方針ともいえます。ここがしっかり固まらないと、プログラム全体にぶれが生じる可能性があります。では、コンセプトをどのようにまとめていくのでしょうか。

1）ニーズを分析する

プログラム対象者のニーズ分析から始める。

・対象者はどんな人たちなのか。
・どういう知識や体力を持っているのか。
・どんな経験をしてきたのか。
・その人たちは何を求めているのか、知りたいのか。

〔ニーズを拾い上げる際の注意点〕

例えば、子ども対象プログラムの場合。子どもが好きなものばかり与えてはいけない。好きではなくとも、子どもに必要なものを与えねばならない。

2）ポテンシャル（潜在能力）を分析する

自分の強みや自分に何ができるかを分析する（自分の潜在能力の洗い出し）。

・持っている知識や技術、得意な場所（ホームグランド）や領域、人脈、時間、資金、興味関心事などを確認。
・補うべき資源（人材、知識など）は何かを洗い出す。

3）「自分の思い」を確認する

自分が何をしたいのか。何を伝えたいのか。どんな木育活動をしたいのか。p6 で記した木育宣言にあたる。

これらの、ニーズ分析、自分の強み、自分の思いをまとめたものがコンセプトの根幹となっていくのです。

木育プログラムの企画立案（大まかな流れ）

①対象と年齢層の確認及びニーズ分析
②共催や受注タイプの場合は、先方の意向をヒアリング
③自分の強みと思いを加えてコンセプト固めへ
④対象人数、場所、時期、時間、回数、協力者（専門家）のリストアップ、予算、リスクマネジメントなどを考慮しながら
↓
「木とふれる、木に学ぶ、木と生きる」の観点を踏まえ、適切なアクティビティを組み込んでプログラムを構築
⑤広報（参加者募集）プランも立案

参考：プログラムの主催パターン

A　自ら企画タイプ
①　自ら主催運営
自分で企画して自らが主催運営する。自分の思いを活動に反映させることができる。予算立てや募集計画をしっかりと。
②　持ち込み企画（共催または相手先主催）
例えば、地元の小学校に木育授業をやりませんかと投げかける。相手のニーズに合ったプレゼンを。

B　受注タイプ
例えば、地元の小学校から木育授業の依頼を受ける。相手の意向をしっかり確かめる。予算面や広報（募集）の負担が少ない。

〔木育マイスターの話〕

「自分ひとりだけで考えていると、出てくる要素が限られてくる。いろんな立場の人とプログラムづくりをすると、自分じゃ思いつかないようなとんでもない発想が飛びかうことも。その中から一筋の光明というか道が開けてきて、“見つけた！”って思う瞬間がある。そんな時は、切れ味のいいテーマが出来上がるんです」

「木を使ってものの形にする仕事をしているから、そこを核にして森や文化へと広げて考えていく。自分のできるところから詰めていくと企画を立てやすい」

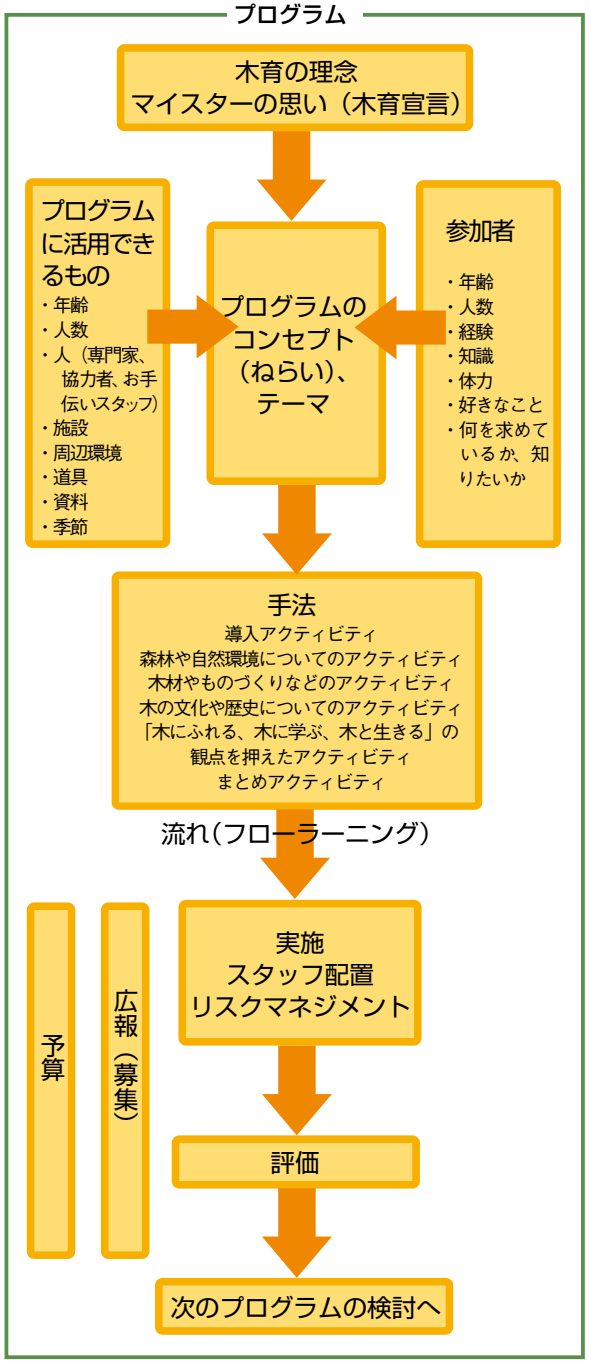
「やっぱりプログラムづくりは難しい。つい、一つのアクティビティをうまくこなすことばかり考えてしまって。もっと大きな視野を持って、何のためにこのプログラムをやるのかという根本を忘れないようにしないと」

〔講師より一言〕

思いを形にするのが得意な人は、プログラムづくりも上手にできる。

by 宮本英樹

〔プログラムづくりの全体像〕



（2）プログラムの進め方

準備８割、当日２割！
プログラム実施の成否は、事前の段取りで決まってしまう

1）実施日の前日までに

企画決定後、プログラム実施前日までの関係者の動き方によって、当日のプログラムの成否が決まります。プログラム全体にかけるパワーの８割以上が準備に注がれると思っていいでしょう。当日は、もうやるだけですから。

- プログラムの詳細計画立て（実行項目、流れの確認、配置スタッフなど）
- 天候不良時の代替案（天気予報チェック）、リスクマネジメント
- 予算の段取り
- 参加者募集（告知、受付、当日の持ち物や集合場所・時間などの案内連絡）
- 協力者、スタッフへの依頼
- 場所の確認（トイレの場所なども）
- 道具の確保
- 資料やアンケート準備
- 保険加入申込　　等々

右ページの表をご覧ください。あるプログラム実施日の進行確認表です。これ１枚で、スタッフ、参加者数、テーマ（コンセプト）、ケガや虫さされなどの起こるかもしれないリスク、個人の持ち物、当日のスケジュール、担当、場所、確認事項、準備物、さらには雨天になった時の対応まで記されています。

ここまで詳細でなくても進行表を作っておけば、スタッフでプログラムの流れを共有できますし、当日は慌てることなく動けます。

〔木育マイスターの話〕
「当日は何が起こるかわからない。もちろん、準備はしっかりやっときます。天気予報はこまめにチェックして。その日の雰囲気や流れに応じて、時間配分の変更なんかはいつものことです」

〔ポイント〕

①場所の事前確認

実施予定場所の事前確認を怠らない。よく知っている場所でも、状況が変わっている場合もある。例えば、幼児対象で森へ行く場合。日頃の大人目線で歩くのではなく、子どもの目線で道の状況や倒木などをチェックする。トイレ確認は重要。

②デモンストレーション

木工体験を行う場合。もし可能ならば、事前に初心者へモニターをお願いし、予定している木工実技を行う。道具の使い方や用語の理解など初心者の陥りやすい事柄を確認し、リスクマネジメントや作業説明に役立てる。

2）実施当日

前日までの準備が整っていれば、あとは実行あるのみ。ただし、準備万端でも予定通り進むことはありません。参加者の状況、話のノリ、天候などにより、当日の動きは変わってきます。そこは、臨機応変に。 注意事項（刃物の使い方など）は、何度も念入りに伝えること。

参加者の興味関心事が想定していたことと違っていた場合。無理やり準備していたことで押し切るのではなく、関心の高そうな話題へ持っていくことも時によっては必要です。

〔ポイント〕

①　参加者の様子をチェック

参加者の様子を見ながら、柔軟な対応をとる。例えば、アクティビティ予定時間が過ぎても、まだ子どもたちが夢中になっているなら、無理やり「時間ですよ」と切ってしまわない。ただし、後半に時間調整をうまくやること。

②　当日のプログラム・リーダーはだれか

企画者の木育マイスターなのか、実施するアクティビティの専門家として呼んだ協力者なのか。リーダーを決めて進行すること。

11 月 28 日プログラム進行確認表　　森つく「たき火カフェ OPEN ！」　　【制作】高野克也

[スタッフ]	計 8 名：高野（ﾘｰﾀﾞｰ）、小西、森口、田辺、長井、神田、高村、矢代　【木育ﾏｲｽﾀｰ研修生】3 名
[参加者]	24 名 / 男：13 名、女：11（小 1：7 名、小 2：2 名、小 3：4 名、小 4：9 名、小 5：2 名）【場所】キトウシ森林公園、ニセウの森
[テーマ]	森の遊び道具を回収する、森の手入れをし遊び場を快適にする、森の資源を知る、火の扱い方を知る。
[留意点]	ハチなどによる虫さされ、防寒対策、ツタウルシなどの植物、道具を使う時のケガ、たき火による火傷。
[持ち物] 個人	タオル、防寒着、帽子、軍手、運動靴（雨天時長靴）、雨具、お弁当、おやつ、着替えのシャツ、

日時	進行	進行管理	場所	運営内容	共通留意事項	雨天時	備考・準備
8:30	スタッフ集合　打合せ 自己紹介・今日の流れ確認 スタッフの役割・気になる参加者を伝える ニセウの森へ備品搬入（高野、長井） 運動会テントをたてる（事務所前：小西・田辺・神田・矢代） 物産センターにて受付（神田・森口） 活動 DVD の上映、名札の配布	高野	物産センター ニセウの森 物産センター	スタッフの役割分担 ねおす号で荷物搬入	8時に物産センターに鍵を借りる 参加者の服装と体調をチェック トイレの案内		プログラムシート、参加者名簿、FA キット、子ども用着替え袋 名札、マジック（マッキー）、活動紹介 DVD
9:30	参加者全員集合 今日の活動内容紹介 スタッフ自己紹介	小西	物産センター	今日のスケジュール説明	人数確認		
9:40	事務所へ移動 荷物を事務所に置く	高野	ねおす事務所	ヨコヅナ、ねおす号で往復	移動時の安全確認 トイレの案内		
9:50 10:30	森を歩いて展望閣をめざす ニセウの森へ移動 ニセウの森でロープを回収する 森の中で自由あそび 焚き木を集める	高野	遊歩道 ニセウの森＆展望閣	ペースの確認 スキー場からまわりこむ	移動時の安全確認 移動時の安全確認 道具使用時の安全確認 ニセウの森ロープ回収時の安全確認	アイスブレイクを兼ねて森探検途中で燃えそうな枯れ枝などを拾いながらバーベキュースペースへ。ナタを使って焚き木をつくる たき火レクチャー 大人が２カ所でつける	 剪定バサミ、麻ヒモ、各種ヒモ、のこぎり、ビニール袋、PP ロープ、予備軍手
11:45	展望閣集合 事務所に向かって降りる						
12:15	昼食（事務所）	高野		たき火台に火をつける	トイレの案内	昼食 焼きマシュマロ	手荒い洗剤、手ふきタオル、ゴミ袋大 1、ガムテープ、ブルーシート 3、あたたかいお茶
12:45	自由時間	高野		寒くならないように身体を動かす誘導	スタッフ配置を意識する	火はストーブとたき火台へ	
13:15	たき火開始レクチャー □ たき火をおこす □ 炭に火をつける	小西	事務所前	子どもたちのサポート 道具の管理	ライター、マッチ、たき火での火傷に注意	自分たちで火をおこしてお茶をわかそう！ ナタを使って薪づくり。火おこし術伝授。バームクーヘン作り。	たき火台 4、ストーブ 2、マッチ、ライター、チャッカマン、焚き付け、割り箸、ナタ、薪、 がんび、おがくず
14:00	お茶とお菓子作り □ バームクーヘン作り □ （たき火台 4） □ チョコレートフォンデュ	高野		バームクーヘン作り方のサポート	道具を使う時の注意		バナナ、バームクーヘン生地、サラダ油、アルミホイル、包丁、まな板、お玉、バームクーヘン生地用お鍋×2、お茶パック、コップ、青皿、
15:15	完成品を実食 片付け 自由時間	高野		全員へ配布			
15:45	物産センターへ移動	高野		ねおす号、ヨコヅナ号で移動	人数確認	ブルーシートで物産センターまで移動	
16:00	物産センターで解散	小西	物産センター	今日の活動報告	次回 12 月 21 日「森のクリスマスパティー」		

（準備物）プログラムシート、参加者名簿、FA キット、子ども用着替え、名札、マジック（マッキー）、あたたかいお茶、活動紹介 DVD、のこぎり×４、ゴミ袋大１、ガムテープ、ブルーシート、お茶、剪定バサミ×１５、たき火台 4、ストーブ 2、マッチ、ライター、チャッカマン、焚き付け、割り箸、ナタ、薪、がんび、おがくず、バームクーヘン生地、サラダ油、アルミホイル、包丁、まな板、お玉、、お鍋、お茶、コップ、バナナ、バター、青皿、子供用レインウェアなど。

（荒天時）雨天時：マッチ４、団扇４、火バサミ２、予備焚き付け２、予備の薪、チャッカマン、ブルーシート小３

※大雪山自然学校で実際に実施したプログロムの進行管理表。リーダー以外のスタッフは仮名にしています。

（3）プログラムの伝え方

〔『木育達人入門』第５章 p37 参照〕

話すだけではなく、触らせるなどの五感を使って伝えることが大切

木育活動を行う立場の人は、正しくわかりやすく伝えることが求められます。一般的に物事を伝えていく手法には、大きく分けて以下の３つのタイプがあります。

１）講義（レクチャー）型

話し手が一方的に伝えていくやり方。講義形式の伝達法。話し手の力量（話の内容、話術）が問われる。わかりやすく伝えるために、映像などを用いてフォローすることが多い。

２）双方向型

聞き手の疑問などに答えていくやり方。話し手と聞き手がやりとりしながら、理解を深めていく。この場合､質問の｢質｣が重要になる。｢なぜ？｣｢何ですか？｣｢どう思いますか？｣などを状況に応じて使い分ける。

３）参加型

課題を与えられた聞き手（参加者）が、プログラムの主体となって課題に取り組み、話し手（指導者）が様々な気付きを促しながら好奇心を引き出していくやり方。

〔参加型の例：木育マイスター研修での「冬芽に関するアクティビティ」〕

グループごとに冬芽を何種類も収集
↓
グループごとに冬芽を分類。分類方法は自由に独自の視点で
↓
グループ発表。｢針葉樹と広葉樹｣｢冬芽をかじって味の違いで｣｢互生と対生｣などで分類
↓
進行役から「あなたは、どんな冬芽になりたいか」の問いかけ
↓
参加者からは、「とげでガードする」「毛で覆って暖かくする」などの冬芽の気持ちになった答えが出された

参加型レベルをめざそう

木育活動の進行役は、参加者の気付きを促す役目があります。したがって、参加型の伝え方ができることが望ましい。ただ、いきなりそのレベルに達するのが難しければ、まずは双方向型の会話を心がけること。

プログラム実施時には、参加者の年齢やプロフィルによって伝え方も変わってきます。共通して有効なのは言葉で説明するだけではなく、見る、触るなど五感を刺激しながらの伝え方。さらに、場の雰囲気を感じ取りながら、その場に応じた間の取り方も重要です。時には、何もしゃべらないで、沈黙の時間をとるというのも一つの手です。

例えば、プログラム開始早々。まだ、だれも場の雰囲気になじんでいません。そんな時に有効なのが、氷を砕く意味のアイスブレイク。共同作業やゲームをすることによって、心や雰囲気がなごんで暖まり“話の伝導率”が高まります。

〔木育マイスターの話〕

「ネタや伝え方の引き出しをいっぱい持つように心掛けている。対象や年齢に合ったやり方ができるように」

「知識だけの伝達よりも、感覚を駆使したほうが伝わります。葉っぱのことを知ってもらうなら、図鑑を見せる。外へ出て木の葉に触る。トドマツの葉をもみもみして匂いをかぐ。体験すると実感が伝わっていくでしょ」

〔講師より一言〕

起承転結。五七五。序破急。

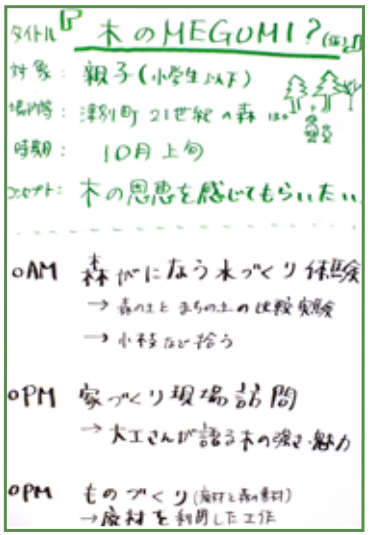
日本語のリズムと同じように、伝え方にも緩急やリズムをつけることが大切。

by 宮本英樹

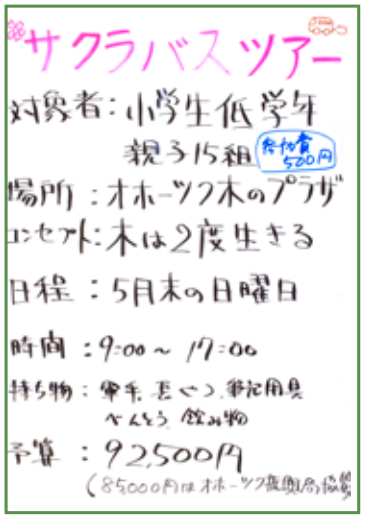
（4）木育プログラムの具体例

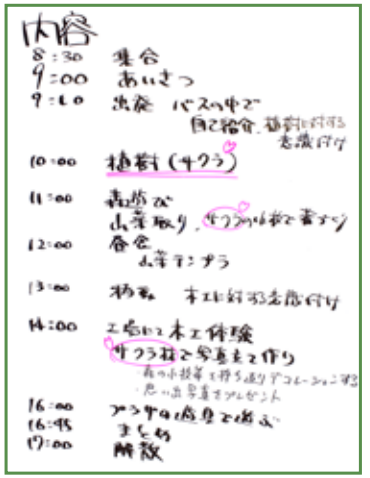
1）木育マイスターが研修で作成したプログラム

育成研修の最終日には、グループに分かれて木育のプログラムづくりを行いました。各研修生が自分の得意分野や今までの経験などを踏まえて活発に議論し、仮想でありながら現実的でもあるプログラムが出来上がりました。その中から３点をご紹介します。

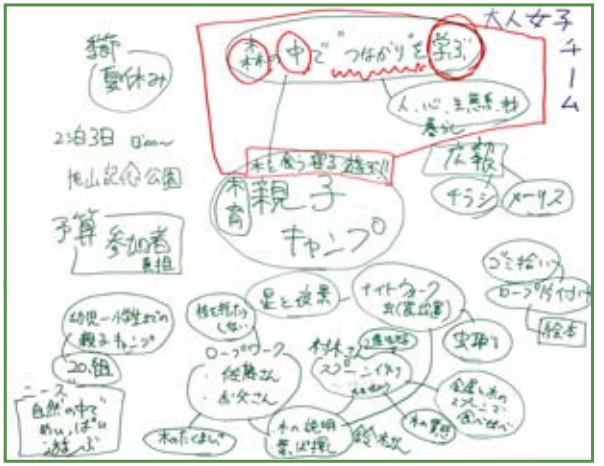


A. 森の MEGUMI?





B. サクラバスツアー



C. 木育親子キャンプ

A.「森の MEGUMI?」。森の役目を実感させ、木を使って日々仕事をしている大工さんの生の声を聞く。最後は廃材でのものづくり。

B.「サクラバスツアー」。サクラをキーにして、植樹や箸づくりなどいくつかのアクティビティをうまく組み合わせた。

C.「木育親子キャンプ」。２泊３日で盛りだくさんの要素が含まれている。発表からも楽しそうな内容が伝わってくる。

２）津別小学校での木育授業

（プロデューサー・講師：煙山泰子）

昔から林業が盛んだった津別町の小学校では、2009年から３年生と５年生に３回シリーズで木育の授業が行われています。その実践例を紹介します。

○主催：津別町教育委員会

→教委より煙山さんに木育授業の相談があり、年間３回、２学年での実施が決定。

○木育活動プロデューサー：煙山泰子（木育ファミリー代表）

→全体企画を立案。３回の授業プログラムの流れを組み立てる。

○講師（プログラム実行者）：プロデューサーである煙山さんが３回とも講師を務める。

○協力メンバー：教委・学校教育課、小学校の先生、バス運転手、木育マイスター研修生

○予算：町予算

○ねらい：木の町・津別に生まれ育った子どもたちが、木に対する認識を新たにし、木や自然に対する親しみや、木の文化に対する理解を深めることによって、自然やふるさとを大切にする心を養うこと。

○プロデューサーの願い：木とのふれあいを通して、子どもたちの心の芽が個性豊かに育まれてほしい。

１回目授業

五感で木とふれあう「木育の玉手箱」

①テーマ：手の中に森を感じよう

②内容：「木育の玉手箱」を使った授業。子どもたちに五感をフルに働かせてもらう。楽しく木とふれあう、木育の導入部分。

③含まれる要素：

・木とふれあう（感じる、楽しむ、遊ぶ、見る、聴く・聞く、触れる、匂い・香りをかぐ）

・木に学ぶ（知る、調べる・探る、気づく）

④授業の流れ：

自己紹介後、きょうの授業で覚えてもらいたい言葉は「木育」（“木”で豊かな心を“育”む）を大きく板書。

↓

玉手箱の中から５枚の板（エゾマツ、イチイ、ミズナラ、センノキ、サクラ）を取り出し、色、重さ、感触、匂いの違いを体感。ルーペで板の断面を観察し、木の内部構造（道管の太さなど）の違いを学ぶ。

↓

２種類（広葉樹のミズナラ、針葉樹のエゾマツ）のカタカタを鳴らして音の比較。

煙山「火の用心の拍子木には、高い音でよく響くナラやカシの広葉樹が使われるよ」

↓

いろいろな種類の松ぼっくりを観察。

↓

玉手箱の次は、木のおもちゃで遊ぶ。木のタマゴ、けん玉、タマコロファミリーなどで。

煙山「サクラのタマゴを選んだ人は、華やかな魅力があって、みんなから愛される人だよ」

↓

絵本（『おぼえていろよ　おおきな木』佐野洋子著）の読み聞かせ。

↓

子どもたちから感想を聞いて、次回予告をして終了。

３年生「木はとってもいい匂い」「木の勉強が大好きになりました」「絵本の話が忘れられません」

２回目授業

つながりを考える「双葉のミズナラ」

①テーマ：「どんな森で育ったの？　どんな時間を過ごしたの？」

②内容：津別町内の道有林に生えている樹齢1200年と言われている「双葉のミズナラ」を見に行く。子どもたちのほとんどが初めて訪れる「双葉のミズナラ」との出会いが、よい経験になるよう、安全や時間配分に考慮して計画を立案。

③含まれる要素：

・木とふれあう（感じる、行く、見る、聴く・聞く、触れる、匂い・香りをかぐ、話す・語る）

・木に学ぶ（見学する、体験する、気づく、集める・撮る、知る、調べる・探る）

・木と生きる（愛でる・楽しむ・慈しむ、つなぐ）

④授業の流れ：

学校からバスで道有林へ移動。林道からミズナラの生えている場所まで300mほど歩くと、大きく枝を伸ばして威風堂々としたミズナラが子どもたちを迎え入れてくれる。

↓

遠くから眺める。樹の下から仰ぎ見る。幹に耳を当てて樹液の流れる音を聞く。幹の周りをメジャーで測る（6m70cm！）。みんなで手をつないで幹の周りを囲む。

３年生「張り切って歩いて着いたら、目の前に大きい木があってビックリ。たくさんのでこぼこがあって、おもしろい形だなと思った」

↓

ミズナラの周囲にはドングリや他の植物の実が落ちている。枯れ葉もふかふか。苔や大きなキノコ、動物の糞も。子どもたちは、自然と森の息吹を感じとる。

３年生「いい匂いがした。葉っぱがかっこよかった。さわってみたらイイ感じだった。めっちゃくちゃ、でかかった。全部すごかった！」

↓

ミズナラの前で記念撮影後、「ミズナラさん、ありがとう」とお礼を言ってから学校へ戻る。

３回目授業

ゆっくりとモノづくりする「自分だけの木のタマゴ」

①テーマ：木で作ってみよう！

②内容：仕上げ前の木のタマゴを磨き上げ、自分の思いを焼きペンで書き入れてクルミ油を塗り、自分だけの木のタマゴを作る。

③含まれる要素：

・木とふれあう（感じる、触れる）

・木に学ぶ（体験する、作る、描く）

・木と生きる（自分で使う、創る、贈る、誰かのために作る、つなぐ）

④授業の流れ：
授業前に会場設営→テーブルの上には一人に一枚ずつカッターマットを敷く。焼きペン加工とクルミ油塗りのための作業スペースを設営し、それぞれにスタッフを配置。

↓

最初にミズナラ見学の振り返り。**煙山「木は森の中で、ゆっくりゆっくり育ってから木材になった。だから君たちも、ゆっくり木と向かいあって、ゆっくりその言葉を聞いてほしい」**

↓

工程の手順説明。キーワードは「ゆっくり」。

↓

10種類の木のタマゴ（ナラ、ニレ、サクラ、エゾマツ、イチイなど）から好きなタマゴを子どもたちに選んでもらう。色、木目、重さ、感触などの違いを感じながら、子どもたちは迷いつつもお気に入りを探し出す。

3年生「ぼくはミズナラのタマゴ。がんばってきれいにしました。なまえは“ミズくん”です」

↓

紙ヤスリで磨く。荒いのから細かい紙ヤスリへ。

↓

焼ペンで文字や絵をタマゴに描く。自分の名前、将来の夢、家族へのメッセージ「おかあさん、おたん生日おめでとう」など思い思いに。

↓

クルミ仕上げ。クルミの実を布で包み、金づちで叩きつぶす。にじみ出た油をタマゴに塗る。

↓

希望者のみ、首から掛けられるリボン付け。みんな、自分で仕上げた木のタマゴがかわいくてしょうがない様子。

煙山「きょうはどうだった？　木の言葉が聞こえてきたかな？」

3年生「エゾマツで作ったぼくのタマゴ。お守りにします」「今度は木のおもちゃを作ってみたい」

3回にわたって行われた木育授業。子どもたちの言葉からも、心に残る授業だったようです。担任の先生からも、「いつもは落ち着きのない子が、じっとだまったままタマゴを磨きあげ、誰よりもツルツルしていた…」と、子どもたちの日頃見せない一面に驚いたという感想が寄せられました。

〔この木育授業の振り返り〕

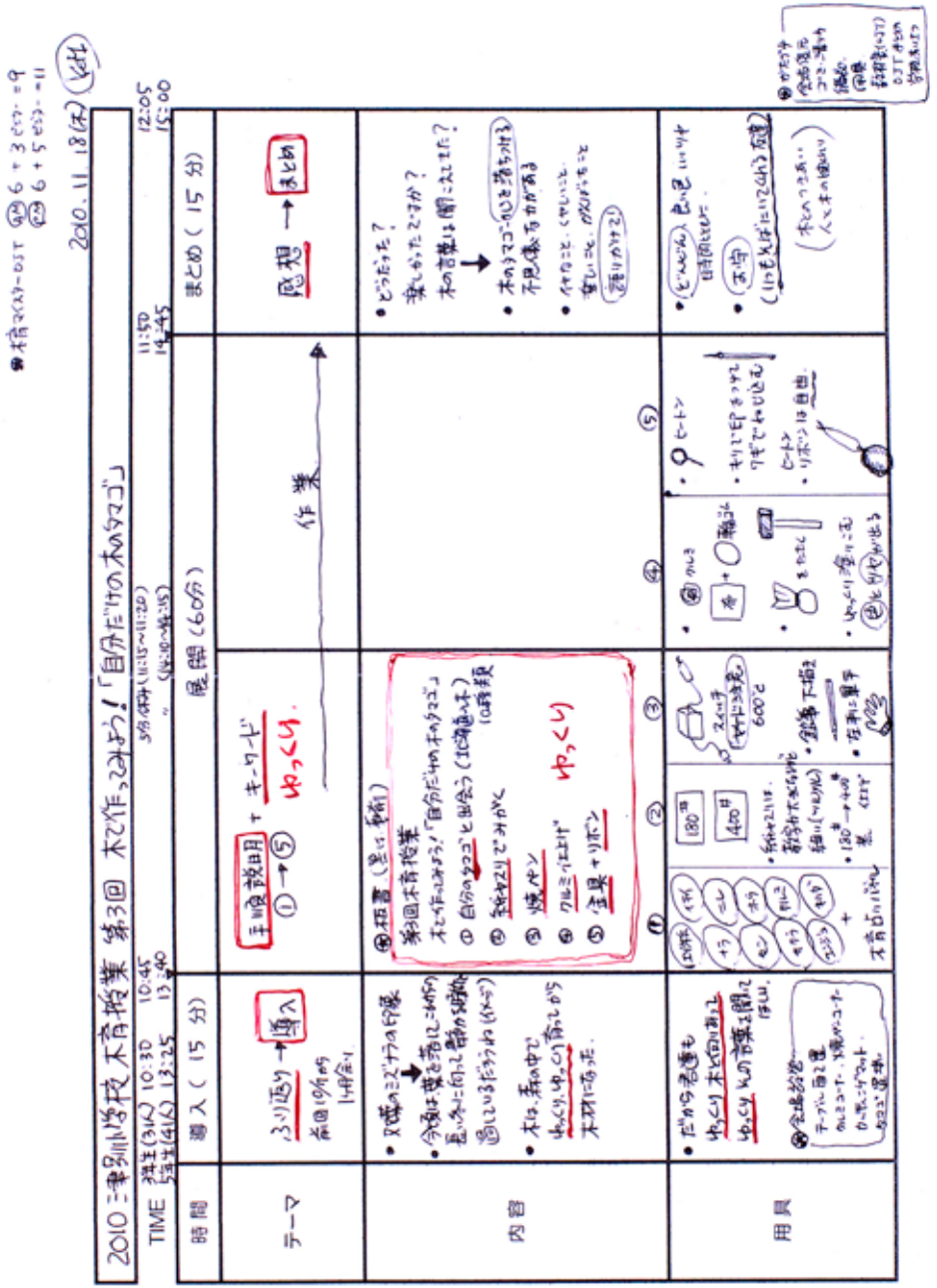
① 主催者とプロデューサー間で事前打ち合わせが入念に行われ、お互いの意思疎通ができていた。

② 上記①を受け、「木とふれあい、木に学び、木と生きる」がうまく融合したプログラムが組まれた。玉手箱やおもちゃで楽しく木にふれる、森に出かけてつながりを学ぶ、一生の宝物になるものを木でつくる。

③ 上記②に基づいて、各実施日の授業展開案が立てられている（p19に参考資料）。

④ 準備8割と言われるように、準備段階で使用道具や訪問場所チェックなどがもれなく行われた。

⑤ プロデューサー兼講師は、長年にわたって木育活動に携わっており、ノウハウの蓄積があり進行がスムーズに行われた。



※3回目の授業展開案（作成：煙山泰子）

3）建築士やデザイナー向け「旭川・木育ツアー」

（コーディネーター：西川栄明）

森林、木材加工や販売の現場、家具製作の見学などを組み合わせた旭川･木育ツアー（対象：首都圏在住の建築士など、3日間）について、企画から実行までの流れを紹介します。

〔企画の始まりから実行まで〕

○2月下旬：

インテリア関連会社のL社（本社：東京）マネージャー（伊藤）から西川（木育マイスター育成研修講師、『木育の本』共著者）へ連絡。

→旭川周辺で森林から木材、家具に至るまでの流れを学ぶツアーができないか。対象はL社の「友の会」会員（建築・インテリア関係が多い）。6月の旭川家具木工祭の時期に。

○3月上旬：

伊藤と西川が打ち合わせ。

→旭川周辺において、川上から川下まで（森林から使い手まで）の流れを見学し、森林，製材、木製家具製造の現状を理解してもらう「木育ツアー」を行うことで合意。企画立案開始。

○3月下旬：

伊藤と西川で企画の詰め。見学先候補を選ぶ。手分けして候補先に企画趣旨を説明し（電話などで）、協力依頼。演習林、製材所、家具メーカー、大学教授など。候補の了解を得て、企画決定。仮行程表作成。

○4月上～中旬：

（伊藤）見学先へ企画書送付。旅行代理店とバス手配などを調整。L社「友の会」会員へ募集告知。

○6月上～中旬：

（伊藤）募集締切→参加者へ行程の確認連絡。

（西川）見学先へ内容と訪問時間の最終確認。進行管理表と資料を作成。講義内容をまとめる。

○6月20～22日：

木育ツアー実施（右ページ参照）

○6月末：

主催者（L社）と西川から各見学先へお礼状と写真送付。参加者からアンケート回収（郵送）。

〔木育ツアー概要〕

○主催：L社

○木育活動コーディネーター：西川栄明

○講師（プログラム実行者）：西川、各見学先の説明者（社長、現場責任者など）

○協力メンバー：L社（伊藤）、バス運転手・ガイド、見学先のスタッフ

○参加者：15名（20代～60代、建築士、家具・インテリアデザイナー、内装工事会社社員など）

○予算：L社予算（参加者参加料含む）。コーディネーターには謝金あり。見学先は無償協力（手土産はわたす）。

○ねらい：木を用いて設計やデザインをするプロの人たちに、川上から川下までの流れ（森林、製材、デザイン、加工、製品、使う）を現場見学しながら、木で作られたモノの価値や木の奥深さを実感してもらう。さらに、旭川周辺で家具産業が発達してきた背景を理解してもらい、北海道で生産された木製家具や道産材の普及につなげる。

○参加者の声：「旭川で家具産業が発達した理由がよくわかった。豊かな自然環境と木材加工技術を持つ人などとのつながりがあってこそだと思った」

〔ポイント〕コーディネーターの役目

1）各講師の話をフォローする。話の中に専門用語などが出てきた時は、かみくだいて説明するか、参加者を代表して質問する。または、参加者に質問を促す。

2）見学先への訪問前後には、参加者に向けて予習（予備知識の付与）と復習（振り返り。補足説明。参加者の感想を聞く）の時間をとる。

3）上記のように、コーディネーターは「つなげる」役目があることを忘れずに。

〔木育ツアー行動内容〕

日時	訪問先など	行動、見学内容
6/20		
12:15	旭川空港	集合。バスで富良野へ移動。 移動時間を利用して、伊藤よりツアーの行程や趣旨説明。 車中講義：西川より「北海道の森林の概略」（資料配布、クイズも〔面積、樹種など〕）。東大演習林（富良野）について予習講義。
13:00～16:00	東大演習林（富良野）	講師：演習林教員「森の恵みと人の暮らし」→資料室見学。演習林の樹木の木材見本について説明→演習林内を散策。天然林施業の説明などを聞きながら、ミズナラ、カバ、ニレなどが生える豊かな森を体感。 移動中に、西川より演習林見学のフォローと車中講義：「旭川の木工産業と製材業、家具産業の歴史」（資料配布）。バス車中から見える自然林とトドマツ人工林の景色の違いの説明も。
17:00～19:30	旭川家具センター／市内のホテル	旭川木工祭会場を各自フリー見学。 デザイン講演会参加→講師：ドイツ人デザイナー。
21:00～	某居酒屋	夕食後、参加者有志で懇親会→主催者側としては参加者の興味関心事がまだ把握できていなかったので、リラックスした会話から参加者が何を求めてきたのかなどを聞くいい場になる。参加者同士にとっても交流の場に。
6/21		
8:30	ホテル	出発。車中で、訪問先の予習講義。
8:50～9:50	T製材所	講師：製材所社長→ミズナラ製材の様子を見学。西川フォロー。
10:00～12:00	O教授宅	講師：O教授→木製家具デザインなどについて。北欧の名作椅子にも道産ミズナラ材が使われていたことも。O教授が日頃使っている木製名作椅子に座りながら話を聞く。西川フォロー。
13:15～14:15	家具メーカー・T社	講師：現場責任者→木製家具製作工程の見学。西川フォロー。
15:00～15:45	旭川銘木市会場	講師：木材協同組合職員→土場に置かれた広葉樹丸太と売買の競りの様子を見学。西川フォロー。
16:00～17:30	家具メーカー・KH社	講師：広報担当者→木製家具製作工程とショールームを見学。西川フォロー。
20:00～	某居酒屋	夕食後、参加者有志で懇親会→2日目となり参加者同士の交流が深まり、見学内容や木について活発な意見交換が行われる。
6/22		
8:30	ホテル	出発。車中で、訪問先の予習講義。
9:15～10:45	家具メーカー・KS社	講師：企画マネージャー→木製家具の企画から製作の流れを見学。製作中に出た端材の利用についても。西川フォロー。
11:00～13:00	旭山動物園	せっかく旭川に来たので、動物園でお楽しみ。
13:15～14:15	木工ｸﾗﾌﾄ作家・T氏の工房	講師：T氏→作品を見ながら、製作ポリシーや木の生かし方に関する話。作業見学。西川フォロー。
14:40～15:40	木工家具作家・D氏の工房	講師：D氏→工房とショールーム見学。木の扱いで気をつけていること、苦労する点などの話。西川フォロー。
16:00	旭川空港	伊藤と西川よりツアーを振り返ってのまとめの話とお礼。解散。

（注1）旭川にはタイプの違う家具メーカーがあることを理解してもらうため、特長のある3社を見学。

（注2）本来は訪問順として、森林→製材→流通→加工製造→使い手の流れに沿うのが望ましいが、今回は効率よい移動経路をとったことや先方の都合などにより上記の行程となった。

＊この木育ツアーでは、プロデューサーというよりもコーディネーターという位置付けの方がふさわしいので、木育マイスターの立場の人をコーディネーターと表記。

木育Q&A

2010年度木育マイスター研修の際に受講生から出た質問や、一般の方から寄せられたお問い合わせなどを基にQ&A形式でまとめてみました。

〔木育活動やプログラムについて〕

Q 木や森をテーマにした絵本の読み聞かせをしたいのですが、お薦めの絵本を教えてください。

A 参考図書の中からお気に入りの絵本を見つけてください。

幼児や小学生向けの木育プログラムでは、絵本の読み聞かせは子どもたちに人気のアクティビティです。その日のテーマにちなんだ絵本を読み聞かせると、子どもたちのイメージが膨らんでいきます。例えば、冬の森を探検する幼児向けプログラム。森へ入る前に『ふゆめがっしょうだん』という絵本を読んであげると、日頃は見落としてしまいがちな木々の冬芽に子どもたちは興味津々です。

絵本の選択については、木育マイスターからこんな話を聞きました。「プログラム作成の時、ここで絵本があったら効果的と思ったら図書館の司書に相談します。こんなテーマのプログラムをやるんですけど、○○について描かれている絵本はないですかと尋ねると、関連した絵本をいろいろ教えてもらえます」。これも「木育はつながりのキーワード」の一例ですね。

→ p32「参考図書」(10) 参照

Q 地域に合った木育活動のやり方を知りたいです。

A まず、地域の状況を知ることから始めてみましょう。

木育活動の企画を立てる前に、地域特性や歴史を把握しておくことです。自然環境では、周辺の森林の状況やその地域に多く生育している樹種など。産業面では、製材業や木製品製造の現状と歴史など。文化・生活面では、地域特有の木の道具や森の食べ物、森や木に関する言い伝えなど。以上のような事柄を踏まえて、プログラムを考えていきましょう。

例えば、林業が盛んだった町での小中学生対象の木育活動の場合。そういう町の周辺には、天然林とトドマツやカラマツの人工林が混在していると思われます。

→異なったタイプの森林を観察することから、森の成り立ちの違いなどを理解させる。北海道にはクリやブナなど木の育つ北限地がいくつかあるので、そういう地域に該当するなら北限の話をからめてみる。人工林では整備されているところと手が入っていないところを比べる。それはなぜなのか。町の林業の歴史をひもときながら、林業の仕事が減少した理由を考えさせる。昔は地元産の木でものづくりが行われていたなら、名人と呼ばれていた人に話を聞きに行く。そして、一緒に木でものを作らせてもらう。

これらをいくつか組み合わせていけば、おもしろいプログラムができるはずです。特にお薦めなのが、森の名人や木の仕事をしている人に話を聞きに行く「聞き書き」。木育に関するあらゆる要素が含まれています。ぜひ、取り組んでみてください。

→ 「聞き書き」については、『木育達人入門』p52、『木育の本』第5章p109、ネット検索で「森の聞き書き甲子園」などを参照

Q 高齢者向けの木育をやってみたいのですが…。

A 道内でも実践して成果を上げているところがあります。

木育は子どもだけが対象ではありません。生まれたばかりの赤ちゃんの木育もあれば、80歳を越えた方の木育もあるのです。

道内でも実践例があります。滝川市の高齢者施設では、近くの森での森林浴や木の実や葉っぱを使ったクラフトづくりを実施。森の散策後に血圧やストレスホルモンの測定をしたところ、参加者の7～8割の人の数値が下がるという結果が出ました。職員の方の話では、「園内ではあまりしゃべらない方も、森へ行くとよく話し出します。ひきこもりがちな人も、森へ行くと笑顔が増える」と。各地でこのような高齢者向けの木育が広がることを期待します。

→ 『木育の達人』p61、『木育の本』p62

Q 森の中を歩いている時に、参加者が「おっ」と食いつくネタを教えてほしい。

A 状況に応じて、自分で考えてください。

場数を踏んで、参加者の反応を見ながらオリジナルのネタを考えていってください。一言で「食いつく」といっても、参加者は年齢や興味関心事が異なりますから、その時の状況により臨機応変に対応する必要があります。

一つだけ、道内のネイチャーガイドならだれもが使う小ネタをお教えしましょう。トドマツとエゾマツの葉を触らせて、一見同じような葉でも実は形状が違うことを体験するアクティビティがあります。エゾマツの葉は先が尖っているので、触ると痛いのです。ということで、ガイドは「『痛（いて）えぞ』のエゾマツと覚えましょう」と言うのが決まり文句になっています。参加者が「おっ」と食いついてくるかどうかは保証しません(ほとんど受けない)。ただし、これでトドマツとエゾマツの見極め方をみなさん学んでかえります。

Q 人前で話すのが苦手で、プログラムの進行をうまくやる自信がありません。

A 経験が何よりです。

最初は自信がなくても、場数を踏んでいくと少しずつ度胸もついて要領もわかっていきます。勉強になるのは、各種の木育活動や体験講座への参加やスタッフとしてお手伝いに行ってみること。様々なタイプの木育マイスターや木工指導者のプログラムの進め方や伝え方を見て、自分に合った方法を取り入れてみましょう（他人の技を盗んで、いいとこ取りする）。そのうち独自のスタイルが確立でき、自信もついていくはずです。

Q 「木の文化」に関することを伝えるには、どうすればいいですか。文化となると難しそうで…。

A まずは、身近な話から少しずつ触れていきましょう。

人は、環境、材料、燃料、食料などの様々な面で、森や木にお世話になってきました。巨樹が生えていれば、自ずと手をあわせ信仰の対象にもしました。「太古から人と木は密接な関係があった。人は木を敬いつつ木の様々な特性を理解し活用し、木の恩恵を受けながら木と共存して今まで生きてきた」。木の文化を伝える際には、これらのポイントを踏まえておくことです。

具体的には、活動の中で少しずつ触れていくだけでもいいのです。例えば、樹木観察の時。木について生物学的な話をするだけではなく、名前の由来（カバはアイヌ語のカリンパが転じて？）、昔の人は特殊な道具に用いた（ホオは刀の鞘に）、古典文学にも登場（カツラは古事記や万葉集などに登場）等々の話に広げていけます。人間が昔から木と付き合ってきたことを実感するために、博物館、古い建造物、遺跡などを見学するのも一つの手です。近くの森林と組み合わせた木育ツアーを組むのもおもしろいでしょう。ツアー例を記しておきます。

「野幌森林公園と北海道開拓記念館・開拓の村探訪」→森林公園で樹木観察した後、昔の道具や古い建造物が集められた開拓記念館・開拓の村（公園敷地内にある）を見学。

「木の文化」といってもかなり幅広いので、やり方は多種多様。まずは、身近な話から始めていけば、そんなに難しくはありませんよ。

Q 「木の砂場（プール）」を使いたいのですが、借りることはできますか。

A はい、借りられます。

道内では、以下の３つの団体が「木の砂場（プール）」のレンタルをしています。

①オホーツク木のプラザ
（北見　TEL 0157-25-1331）
② NPO 法人北海道子育て支援ワーカーズ
（札幌　TEL 011-788-7841）
③道民の森（当別町　TEL 0133-22-3911）

レンタル料、貸し出し期間、運送費などの条件が団体により異なりますので、詳細については直接お問い合わせください。

例えば、①オホーツク木のプラザでは、リース料１万円プラス運送費（2011 年３月現在）。小型すべり台やシーソーなど各種木製遊具の貸し出しも行っています。② NPO 法人北海道子育て支援ワーカーズでは、「木の砂場」の遊具のみのレンタルは行っていません。遊び方を含めた体験プログラムとしてのレンタルを行っています（専門のスタッフを派遣）。③道民の森は、冬期閉鎖期間中のみ貸し出します。

Q プログラムに小椅子を作る木工体験を組み入れようと思います。材料の調達はどうすればいいですか。

A 木工関係者に相談。木材販売会社、ホームセンターなどでも購入できます。

木工関連のアクティビティを担当する方に、まず相談することです。木工職人や家具メーカーの人に協力してもらう場合、製作中に出た端材を利用させてもらえる可能性があります。購入する場合も、仕事で取引のある木材店を紹介してもらえるかもしれません。

そういうルートがない場合、ホームセンターや一般の方向けに少ロットでも各種木材を販売している店で購入すればいいでしょう。近所の材木屋さんに飛び込みで行って、「木育の活動で材が必要なんですが」と交渉すれば安価（無料？）で提供してくれるかもしれません。保証はしませんが。

→ p31「広葉樹材を小売りしている店」

Q 研修の際、木製道具は木の特性を見極めて使われる木材が大体決まっていると教わりました。自分でも、木の性質と用途の関係について勉強したいのですが…。

A 関連書籍を読んだり、木に携わる仕事をしている人に話を聞いてみましょう。

まずは、木の特徴や用途について書かれた本を読むことから始めましょう。p32 に何冊か紹介していますので、興味のある本から読んでみてください。

ただ、本からの知識だけでは実感がわきませんよね。機会があれば、木工職人や家具づくりをしているような木と関わる仕事をしている人に会って、話を聞いてみることです。例えば、「カツラはノミばなれがいいし、削り味もいい。木目がおとなしくて邪魔にならない。とても扱いやすい材だ」と職人さんの生の声を直接聞くと頭の中にこの言葉が残って、カツラの用途が多岐にわたる（家具の引き出しの側板、鎌倉彫の材料、碁盤、仏像など）ことが、より一層理解できるようになります。

→ p32「参考図書」（4）参照

Q 木育を実施する際、予算を補助してもらえる助成金や補助金はありますか。

A はい、あります。

木育活動に対応してもらえるかもしれない助成事業や基金が、国土緑化推進機構や林野庁などにあります。年度によって内容の変更などがあるので、詳細は個別にお問い合わせください。

→ p31「木育に活用できそうな助成事業や基金」

Q プログラム協力者（専門家）への謝礼はどうすればいいですか。ボランティア活動としてお願いしてもいいですか。

A それは、ケース・バイ・ケースです。

うーん、これは悩ましい問題です。プログラムの主催はどこか。協力者がプロかアマチュアか、公務員か民間人か。いろいろなパターンによって、謝金を払うかボランティアでお願いしてもかまわないか違ってきます。

プロの木工作家に講師をお願いする場合、本来なら謝金をお支払いするのが望ましいです。ある町の木工施設では、プロの方へは時間 2000 円を目安にしています。別の町の教育委員会の民間人への謝金は、プロアマ関係なく一回の授業に 5000 円です（もっと高いところもある）。主催が行政なら、その組織の規定に従うことになります。森林管理署や道の総合振興局森林室へ依頼して職員に講師として来て

もらう場合は、公務員の仕事になるので謝金は必要ありません。

民間主催の場合、予算が厳しいことがほとんど。したがって、プロの協力者にもボランティアでお願いすることも多いです。親しい友人知人関係に「折り入って頼みたいことが」「協力してもらえませんか」と頭を下げてみてください。すると、企画の趣旨に賛同して意気に感じてくださる方が多々あります。日頃から幅広い人脈を作っておくことですね。なお、謝金は払えなくても、交通費だけはお支払いする場合もあります。

Q プログラム参加者には保険に入ってもらったほうがいいですか。

A 入ってもらうのが望ましいです。

木工体験や森の中でのアクティビティなどの際には、参加者の保険加入が望ましいです。保険の種類もいくつかあります。詳細は保険会社にご相談ください。

基本的には傷害保険の加入となりますが、その中でもスポーツ傷害保険やイベント傷害保険などがあります。前日までに参加予定者の氏名・住所を保険会社に連絡しておくやり方や、参加人数 20 名という連絡だけでもいい場合など、いくつかのパターンがあります。保険料も人数や危険度などにより異なりますが、一人 100 円程度から数 100 円程度の保険料です（通常は参加者負担）。

主催する活動が多い方には、賠償責任保険への加入をお勧めします。これは、事故が発生した場合、主催者が損害賠償責任を負担することによって被る損害に対して保険金が支払われる保険です。個人でも加入できます。

〔木と人との関係など〕

Q 「森の幼稚園」に通った子どもたちは、その後の成長にどのような変化がありますか。

A 小学校入学後、授業へ集中し、問題解決能力があり、他を思いやるやさしさなどが見受けられるとの調査結果が。

この質問内容には、みなさん興味ありますよね。「森の幼稚園」は環境のいい場所で行われるし、何となく子どものためにはいいだろうなとは思っている。でも、実際にその後の子どもの成長にどう影響を及ぼすのか。

この疑問に答えるためにドイツの小学校教師ペーター・ヘフナー氏が、ドイツの「森の幼稚園」に通った子どもと普通の幼稚園に通った子どもの小学校入学後の実態調査を行いました。その分析と検討をまとめた本が刊行されています（『ドイツの自然・森の幼稚園―就学前教育における正規の幼稚園の代替物』ペーター・ヘフナー、訳・佐藤竺、公人社、2009 年）。本の記述によると、「森の幼稚園」卒の子どもは以下の点が優れているようです。授業に集中。家の仕事をよくする。クラスの仲間と助け合い、公平な態度、他を思いやるやさしさ、問題解決能力がある。学業では、特に自然科学の分野に優れ、独創的で空想力があるので音楽や美術の領域でも優れている。

これはあくまでドイツの例で、そのまま日本にあてはめることはできませんが、なかなか興味深い調査結果です。

Q 木をふんだんに使った住宅や木造校舎で過ごすほうが感覚的に「いいなあ」とは思いますが、何かデータとして裏付けるものはありますか。

A 木造校舎に関する調査データがあります。

木造校舎と鉄筋コンクリート校舎で学ぶ児童や教師について、病欠数やインフルエンザによる学級閉鎖数などを調査した結果によると、木造校舎の学校のほうが低い数値が出ています。木造校舎に通う児童は、情緒が安定しているという傾向が出ました（＊１）。

最近行われた、校舎内装の木質化校と非木質化校（鉄筋コンクリート）の比較調査でも、非木質化校では木質化校よりもやや落ち着きがなく、友人関係に悩みを抱える児童が多いという結果が報告されています（＊２）。

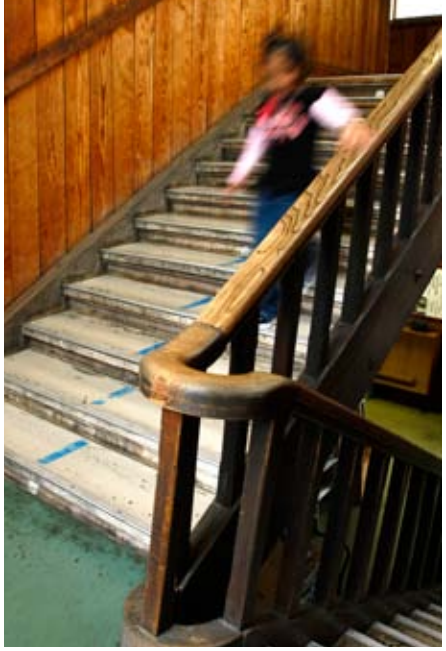
＊１：「木造校舎の心理への影響」（橋田紘洋、『木造校舎の教育環境―校舎建築材料が子ども・教師・教育活動に及ぼす影響』、(財) 日本住宅・木材技術センター、2004 年）

＊２：「児童のストレス反応に及ぼす学校内装の木質化の影響」（鶴巻麻依子、林香織、尾崎啓子、浅田茂裕、『こども環境学研究』第５巻第３号、こども環境学会、2009 年）

Q 各年齢によって子どもたちが木のおもちゃでどのように遊ぶか、実例をあげて教えてもらえますか。

A 「新生児ならガラガラで…」と、p29の表にまとめました。

木のおもちゃや遊具は、子どもの五感を刺激します。自然が与える心地よさを子どもたちが体感していくのです（色、匂い、音など）。



年月が経つといい色合いになり、壊れても直すことができ、愛着を持って大切に使える「木のおもちゃ」。成長と共に、使い方や興味の示し方も違ってきますので、それらを表にまとめています。

→ p29「幼児の成長と木のおもちゃの関係」

〔木育マイスターに関すること〕

Q 木育マイスターに木育の授業をお願いしたいのですが、どこに連絡すればいいですか。

A 木育マイスター紹介サイトをご覧ください。

木育マイスターを紹介するウェブサイトが、2011 年４月から北海道水産林務部林業木材課「木育」サイトで公開されます（掲載承諾者を紹介）。それをご覧になって、近隣の地域にお住まいの木育マイスターに直接ご連絡ください。

→ http://pref.hokkaido.lg.jp/sr/rrm/mokuiku/

Q 私は木のことについて詳しくないんですが、それでも木育マイスターになれますか。
（関連質問：木の種類はいっぱいありますが、木育マイスターとしては最低限どれくらい知っておけばいいですか）

A もちろん、なれます。ただし、勉強もしてくださいね。

もしあなたが幼稚園の先生だったとします。「幼稚園で木育に取り組みたいから、私が木育マイスターになってみよう」と思ったとしたら、これはもう素晴らしい動機です。でも、木のことはよく知らない。なので、ちょっと不安…。心配ご無用です。木育マイスターの役割のページにも書いてあるように、木に詳しいというよりプロデューサーとしての役目が大切なのです。あなたは幼児教育のプロという得意分野をお持ちですから、それを強みとして木育活動の推進役として活躍してください。

ただし、これを機に少しずつ木や森のことも勉強していきましょう。木は世界中にいっぱい生えていますが、身近な北海道によく見かける木から学んでいきましょう。以下の木をマスターしておけば、道内での森歩きが楽しくなってきます。基本です。

針葉樹：トドマツ、エゾマツ、アカエゾマツ、カラマツ、イチイなど

広葉樹：ミズナラ、カバ類（ウダイカンバ、シラカバなど）、カツラ、ニレ、タモ、カツラ、シナ、センノキ（ハリギリ）、ホオ、イタヤカエデ、ヤマザクラ、クルミ、ブナ（道南のみ）など

→ p31、32「参考図書」(3)～(5) 参照

Q 木育マイスターの育成研修を受けたいのですが、今後の募集について教えてください。

A 2011 年度の研修は実施される予定。

2011 年度は、2010 年度に引き続き北海道の主催で木育マイスター育成研修が実施される予定です。研修時期など募集については、開催が決まり次第、北海道水産林務部林業木材課のウェブサイトなどで告知されます。12 年度以降の実施については未定です。

Q 木育インストラクターという木育指導者がいると聞きました。木育マイスターとは違うのですか。

A 違いますが、木育活動を推進する立場という基本的な役割は同じです。

2008 年度と 2009 年度に林野庁から委託を受けた NPO 法人活木活木（いきいき）森ネットワークが、全国から公募して「木育インストラクター研修会」を開催（基本は 2 日間。今後の開催は未定）。受講者には木育インストラクター研修受講修了書が発行されました。木育の意義を理解し、森林、木材、環境についてわかりやすく伝える指導者であり、各地で進められる木育の普及・啓発活動においてリーダーとして活躍することが期待されています。

ということで、木育マイスターと基本的なところで求められる役割は同じです。木育マイスターの中にも、木育インストラクター受講修了者がいます。

なお、NPO 法人活木活木森ネットワーク発行の『木育推進サービスパック』は木育活動に役立つ支援ツールです。パックの中には、数多くのアクティビティ例を紹介した「アクティビティシート」や小中学生に正しい木工具の使い方を解説した「子どものための木工具の使い方」などがあり、大変参考になります。パックは、ウェブサイトからダウンロードできます。

→ http://www.mokuiku.jp

〔幼児の成長と木のおもちゃの関係〕

おもちゃ	年齢の目安	おもちゃの特長、子どもの行動など
ガラガラ	新生児～	初めて出合うおもちゃ。お母さんの声に近い響き。親が声をかけながらやさしく振る。子どもが追視できるようになれば、ゆっくり動かす。子どもが手に持てるようになったら、感触を自分で楽しむようになる（口に持っていく、舐めることも大事な遊び）。
玉ころがし（追視するおもちゃ）	お座りの頃～	いろいろな種類あり。ゆっくり動く、音を楽しむ、見て楽しむものなど。はじめは大人がやってみせる。子どもが自分で遊べるようになると、必ず思うような結果が得られるおもちゃ。
プルトーイ（引っ張るおもちゃ）	お座りの頃～	まず大人が引っ張って、「移動したい」という気持ちを引き出す。子どもが歩けるようになると、自分で引っ張って歩く、走る。重みがある素材が向いているので、木製のものが多い。
パズル	1 歳頃後～	簡単なボックスパズルは、型合わせだけではなく蓋を開けて出し入れすることも楽しい（丈夫さは安全性に繋がっている）。手に持った時の感覚や重さ、うまく入った時の音などが遊びに安定感を与える。種類が多いので、幅広い年齢層で楽しめる。
ハンマートイ	2 歳頃～	打ち叩くおもちゃ。適度の重さがあるので打ちやすい。自分の腕の動きをコントロールしながら遊ぶ。達成感が持てる。親を困らせる行為も遊びなら OK。力を試す機会を提供する。
汽車	2 歳頃～	木製レール・動力がついていない汽車（だから丈夫）。自分の力で動かすので、遊びの自由度がありイメージが広がる。強い自分を表現したい時期には、大切な遊び。
ままごと	2 歳半頃～	ごっこ遊びを楽しむ。なりきって遊べる本物のような質感と大きさ。
こま	3 歳ぐらい～	お座りの頃から、大人が回したこまを見て楽しむ。1 歳くらいから止めて楽しむ。簡単なものは 2 歳台でも回せる。3 本の指を使う遊び。色や模様が変化することの不思議さにわくわくする気持ち。
積み木	1 歳頃～本格的には、4 歳ぐらい～	木製遊具の代表格。種類が多いので幅広い年齢で楽しめる（大人も）。2 歳台になると、いっぱい集める、並べる。4 歳ぐらいになると、立体をつくることを意識する。基尺を合わせたものを増やしていくことで、遊びが広がる。

（長谷川敦子〔NPO 法人北海道子育て支援ワーカーズ〕作成表を一部改変）

〔木製遊具のある施設・木工体験ができる施設 一覧表〕

＊開館時間、使用方法、設置備品などについて、訪問前に必ずお問い合わせください。
＊△は、団体使用などの条件付き。

エリア	施設名	所在市町村	電話番号	木製遊具がある	木工体験ができる
道央	道立道民の森	当別町	0133-22-3911	○	○
道央	ちらいおつ遊び塾	月形町	0126-22-4079	○	
道央	札幌市子育て総合支援センター	札幌市	011-208-7961	○	
道央	札幌芸術の森　木工房	札幌市	011-592-4122		○
道央	黒松内町ブナセンター	黒松内町	0136-72-4411	○	○
道央	ウヨロ環境トラスト	白老町	0144-85-2852	○	△
道央	道立羊蹄青少年の森	真狩村	0136-45-2955	○	○
道南	登別市ネイチャーセンターふぉれすと鉱山	登別市	0143-85-2569	○	○
道南	匠の森公園	北斗市	0138-77-9712		○
道南	道立森少年自然の家	森町	01374-5-2110	○	○
道南	江差町生きがい交流センター	江差町	0139-52-5663	○	
道北	道立旭川２１世紀の森	旭川市	0166-76-2454	○	○
道北	道立林産試験場「木路歩来（コロポックル）」	旭川市	0166-75-4233	○	
道北	カムイの杜公園（わくわくエッグ）	旭川市	0166-63-4045	○	
道北	道の駅「絵本の里けんぶち」	剣淵町	0165-34-3811	○	
道北	絵本の館	剣淵町	0165-34-2624	○	
道北	道立トムテ文化の森	名寄市	01654-3-7400	○	△
道北	稚内市少年自然の家	稚内市	0162-28-1632		△
道北	山村都市交流センター（木遊館）	音威子府村	01656-5-3019		○
道東	オホーツク木のプラザ	北見市	0157-25-1331	○	○
道東	果夢林の館	北見市	0157-45-3373	○	○
道東	道立津別 21 世紀の森	津別町	0152-76-2100	○	○
道東	つべつ木材工芸館	津別町	0152-76-3335		○
道東	木楽館	遠軽町	0158-42-8360		○
道東	木のおもちゃワールド館　ちゃちゃワールド	遠軽町	0158-49-4022	○	○
道東	丸瀬布木工体験交流館	遠軽町	0158-47-3071		○
道東	森の美術館「木夢」	西興部村	0158-87-2600	○	○
道東	興部町立図書館	興部町	0158-82-4191	○	
道東	オホーツク流氷公園	紋別市	0158-27-4560	○	
道東	帯広の森（はぐくーむ）	帯広市	0155-66-6200		○
道東	もっくんひろば（帯広市児童会館）	帯広市	0155-24-2434	○	
道東	道立十勝エコロジーパーク	音更町	0155-32-6780	○	
道東	釧路市おもちゃライブラリー	釧路市	0154-25-7567	○	
道東	根室市つどいの広場「くるくる」	根室市	0153-24-9696	○	
道東	道立ゆめの森公園	中標津町	0153-72-0471	○	

〔木育に活用できそうな助成事業や基金〕

（＊内容や名称が変更される場合があります。詳細はネット検索や電話問い合わせなどで、個別にご確認ください）

(1) 国土緑化推進機構（TEL 03-3262-8451 代表）
・緑と水の森林基金：「国民参加の森林づくり」運動の推進のための事業に助成
・緑の募金公募事業：森林整備及び緑化推進の事業に助成
(2) 林野庁（TEL 03-3502-8111 代表）
・森林づくり国民運動推進事業など
→ 森林整備部 研究・保全課
・地域材供給倍増事業の「木育の実践手法の開発」
→ 林政部 木材利用課
(3) 子どもゆめ基金（TEL 03-5790-8117）：
子どもの体験活動などに対する助成
(4) 北海道森と緑の会（TEL 011-262-9022）：
「緑の募金公募事業」「緑と水の森林基金事業」
(5) コープさっぽろ「コープ未来（あした）の森づくり基金」（TEL 011-671-5651）
(6)（株）ニトリ「北海道応援基金」
（TEL 011-666-0114）
(7) 北海道 CGC「みどりとこころの基金」
（TEL 011-813-3481）

〔広葉樹材を小売りしている店
＊ホームセンター除く〕

・木心庵（きしんあん）（札幌市豊平区）
TEL 011-822-8211
・道央ランバー「木の素材屋さん」（芦別市）
TEL 080-3232-3312
・ウッドショップ木蔵（十勝管内音更町）
TEL 0155-31-6247
・鈴木木材（桧山管内厚沢部町）
TEL 0139-64-3339

〔参考図書、ウェブサイト〕

(1) 木育全般について
・『木育達人入門』（北海道、非売品）
→ 北海道水産林務部林業木材課のサイトからダウンロード
http://www.pref.hokkaido.lg.jp/sr/rrm/
・『木育の本』（煙山泰子 / 西川栄明、北海道新聞社）
・『2010 年度木育マイスター育成研修報告書』
→「NPO 法人ねおす」http://www.neos.gr.jp からダウンロード
・『木育ファミリー』ウェブサイト
http://www.mokuiku.net
・『北海道の木育』ウェブサイト
http://www.pref.hokkaido.lg.jp/sr/rrm/mokuiku/

(2) 木育プログラム、アクティビティ
・『木育達人入門』第７章、第８章
・『木育推進サービスパック』（NPO 法人活木活木［いきいき］森ネットワーク、非売品）の「木育アクティビティシート」
→ http://www.mokuiku.jp からダウンロード
・『木育のいっぽ』』（岐阜県林政部、非売品）
→ ウェブサイト「岐阜県 木育のいっぽ」でネット検索。「木育読本」ページ参照
・『森林環境教育プログラム LEAF プログラム事例集』（国際 NGO FEE Japan［国際環境教育基金］）
→ 入手は「NPO 法人ねおす」へ問い合わせ
・『自然体験活動指導者 安全管理ハンドブック』（NPO 法人自然体験活動推進協議会 CONE）
→ CONE のサイトに掲載。体験活動の場面ごとに安全管理の注意事項が説明されている。必読。
http://www.cone.jp/html/special/SHB/index.html

(3) 図鑑、事典、統計
・『新版 北海道樹木図鑑』（佐藤孝夫、亜璃西社）
→ 木育マイスター必携書！
・『樹皮ハンドブック』（林将之、文一総合出版）
・『冬芽ハンドブック』（解説：広沢毅、写真：林将之、文一総合出版）
・『新版 北海道きのこ図鑑』（高橋郁雄、亜璃西社）

・『原色木材大事典170種』（村山忠親、誠文堂新光社）
・『北海道林業統計』（北海道水産林務部）
→ 水産林務部林業木材課のサイトからダウンロード。森林面積や木材生産量など北海道林業の詳細な年度版基本データ。データを読み込めば教材にも活用できる。毎年12月に前年度統計が発表

(4) 樹種ごとの蓄積、性質と用途、木の文化など
・『日本の樹木』『続・日本の樹木』（辻井達一、中公新書）
→ 2冊合わせて200種以上の樹木にまつわる、生物学的な説明から身近な話題に至るまで読みやすく書かれている
・『森の博物館』（稲本正、小学館）
・『木なまえ・かたち・たくみ』（白洲正子、平凡社ライブラリー）
・『木のいのち木のこころ』（西岡常一 / 小川三夫 / 塩野米松、新潮文庫）
→ 宮大工棟梁の木に対する思いが伝わってくる
・『木と日本人』（上村武、学芸出版社）
・『北の木と語る』（西川栄明、北海道新聞社）

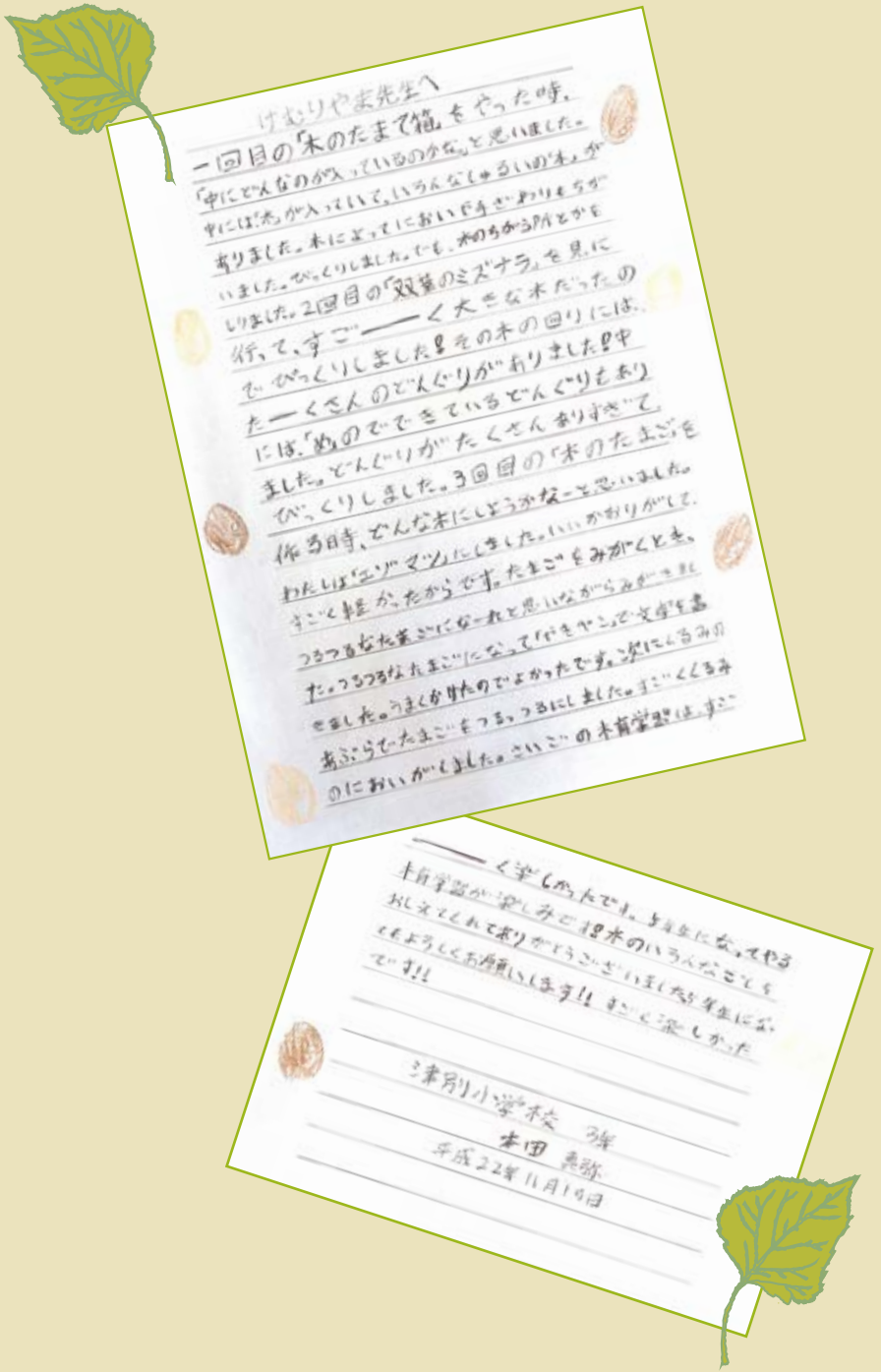
(5) 森林や林業の現状を知る
・『森林異変』『森林からのニッポン再生』（田中淳夫、平凡社新書）
→ 森林ジャーナリストが森林や林業について鋭くわかりやすく解説
・『日本林業はよみがえる』（梶山恵司、日本経済新聞出版社）
→ 少し専門的。田中氏の本と読み比べるとよい
・『基礎から学ぶ 森と木と人の暮らし』（鈴木京子 / 浜田久美子 / 赤堀楠雄、農文協）
→ 森や木についての入門書

(7) 森林療法について
・『森林療法のすすめ』（上原巌、コモンズ）
・『実践！ 上原巌が行く森林療法最前線』（上原巌、全国林業改良普及協会）
→ 著者は森林療法の第一人者

(8) 木工や道具の使い方について
・『手づくり木工大図鑑』（講談社）
・『手づくりする木のカトラリー』（西川栄明、誠文堂新光社）
・『木工用手道具入門』（誠文堂新光社）
・『子どものための木工具の使い方』（NPO法人活木活木 [いきいき] 森ネットワーク、非売品）
→ 上記(2)掲載サイトからダウンロード

(9) 森や自然についての読み物
・『森の生活』（ヘンリー・D・ソロー、訳：飯田実、岩波文庫）
・『センス・オブ・ワンダー』（レイチェル・カーソン、訳：上遠恵子、佑学社または新潮社）

(10) 木や森の絵本（☆は、読み聞かせにお薦め）
☆『木』（画：佐藤忠良、文：木島始　福音館書店）
→ 最後にあっと驚く仕掛けが
☆『おぼえていろよ　おおきな木』（佐野洋子、講談社）
→「おぼえていろよ」と言っていたおじさんにとって、木の存在は…
☆『14ひきのひっこし』（いわむら かずお、童心社）など、「14ひきのシリーズ」12巻
→ 森で暮らすねずみ一家の心温まるお話
☆『おおきな木』（シェル・シルヴァスタイン、訳：村上春樹、あすなろ書房）
→ 少年と木の交流を描いた名著を村上春樹が翻訳
☆『ふゆめがっしょうだん』（写真：冨成忠夫 / 茂木透、文：長新太、福音館書店）
→ 冬芽の写真がインパクトあり
☆『木はいいなあ』（ジャニス・メイ・ユードリイ、絵：マーク・シーモント、訳：さいおんじ さちこ、偕成社）
・『木のうた』（イエラ・マリ、ほるぷ出版）
・『木をかこう』（ブルーノ・ムナリ、訳：須賀敦子、至光社）
・『はるですよ ふくろうおばさん』（長新太、講談社）
・『どんぐり』（こうや すすむ、福音館書店）
・『はっぱじゃないよ ぼくがいる』（文・写真：姉崎一馬、アリス館）
・『きりかぶ』（なかや みわ、偕成社）
・『えぞまつ』（ぶん：神沢利子、え：吉田勝彦、福音館書店）
・『木を植えた男』（作：ジャン・ジオノ、絵：フレデリック・バック、訳：寺岡襄、あすなろ書房）



発行日：2011 年 3 月
発　行：NPO 法人ねおす
〒064-0952 札幌市中央区宮の森 2 条 14 丁目 1-14
TEL 011-615-3923
http://www.neos.gr.jp

編　　集：西川栄明
編集協力：北海道水産林務部林業木材課、
　　木育ファミリー
デザイン：高橋雅子